

行政評価委員会開催結果報告書

平成24年9月26日

会議の名称	平成24年度第10回石狩市行政評価委員会
開催日時	平成24年7月30日(月)13時25分～15時50分
開催場所	石狩市役所3階 庁議室
出席委員	松井委員長 長谷部副委員長 堀内委員 堀委員 岩崎委員 (計 5名)
欠席委員	 (計 0名)
説明員職氏名	教育支援センター 西田センター長、森課長 (計 2名)
傍聴者	 (計 0名)
議題等	1 議題(部局ヒアリング及び評価意見の検討) (1)施策「学校教育の充実」について 2 その他(次回の日程確認等)
結果	・議題の施策について、担当部局を交えて事前確認事項の補足質疑、意見交換(担当部局ヒアリング)を行った後、評価意見のまとめに向けた委員協議を行った。 ・検討意見は事務局にて取りまとめ、次回以降の委員会で各委員の確認を受けて確定することとした。 (次回開催日程) 第11回 平成24年8月8日(水)9:30～ 於:庁議室
事務局職員	企画経済部 松田企画課長、佐々木主査、青木主任

審議内容の記録（審議経過、結論等）

1 開会（13：25）

2 議事

(1) 施策「学校教育の充実」について

（担当部局ヒアリング）

【質疑応答、意見交換】（ は委員発言要旨、・ は担当部局及び事務局発言要旨）

（特別支援教育運営事業）

発達検査の位置付けは。

・発達検査は、白黒を付けるということではなく、その子の特性を掴むことを目的に実施しているもの。その後の相談やアドバイスに活用している。

特別支援教育支援員の配置については、小学校1年生には手厚いが、進級した際の事が問題である。今後、次の段階についてはまだ検討されていないのか？

・子ども一人一人でニーズが違う。発達障がいの子には必ず個別支援が必要とは限らない。その子どもに合わせた計画が必要である。学校や保護者と協議し、その子に合わせた支援策を考えている。

発達障がいは心の問題なのか。

・心というより、脳の発達の問題だと考えている。知的に遅れていない場合は通常学級に通うケースもある。

国の調査では、支援の必要な子はクラスに6%と言われている。石狩市ではどの程度か。

・学校巡回での聞き取りでは、国とほぼ同様の5～7%である。

親の認識は。

・入学前のスクリーニング検査や保健師との関わりの中で、早期の発見に努めているが、保護者によっては認知していないケースなど、まちまちである。保護者に理解してもらうのも仕事と考えている。

学年が進むと状況が改善していくことは多いのか。

・ADHDの場合、小学校2・3年生がピークで、10歳の壁を超えると落ち着く子が多い。環境の影響は大きい。

学校は色々と努力していると思うが、家庭環境の影響も大きいと思う。学校にお任せな家庭が多いと、なかなか改善していかないのではないのか。

・家庭との教育相談を積み重ねている。家庭での対応が困難なケースは個別対応を考えている。

保護者を支援する場として、気持ちを切り替えられる学校は重要である。手厚い状況だとは思いますが、継続的な拡大が望まれる。

支援員の中には、学校現場で孤独感を持ちながら携わっている場合もあると思う。支援員相互の交流を広げて行くことも大切であると思う。

教員と支援員、家庭の三者が役割分担する仕組みはできているのか。また、学校間で対応のばらつきはないのか。

・平成19年の法改正により、発達障がいも通常学級における教育として定義されており、どのクラスにも支援の必要な子はいるという前提で対応している。各学校にコーディネーターを配置して、家庭とのパイプ役を担っており、学級担任に負担がかからないよう対応している。学校間のばらつきは

ない。

コーディネーターや支援員の資格は。

・校内のコーディネーターは校長が教員の中から任命し、地域コーディネーターは教育委員会の非常勤職員の位置づけである。

特別支援教育支援員の配置など人的支援は、ニーズに合わせて拡大していく必要があると思う。現在は1年生にのみ対応しているが、課題は進級した時である。学びの場の変更は極力避けるべきであると思う。

・知的な遅れが大きい子の場合は、学びの場を変えた方が本人にとってプラスのケースもある。

普通学級について行けない子どもの学年を繰り下げるケースはあるのか。

・プログラムを変更するだけである。文部科学省からの指導で、学年を変更することは無い。

特別支援学級の配置状況は。

・小学校は11校/全13校、中学校は7校/全8校。浜益小、生振小、厚田中には配置が無い。

特別支援教育支援員の人材探しは。

・要綱に基づき、一定の資格を条件に公募している。定員に対して3倍程の応募がある。

(不登校児童生徒支援事業)

ふらっとくらぶをその卒業生にも開放していることは評価できるが、一方で、不登校は中学生で50人前後にまで達していると聞いている。ふらっとくらぶにさえ来ることができない子どもへの対応が課題ではないか。

・ふらっとくらぶは、原則として中学校卒業までが対象であるが、今年度、指導員が空いている時間(水曜日15時以降と金曜日午前)を活用して卒業生の来訪を受け入れている(2名程度)

・今後、保健福祉部のひきこもり担当部局とも連携しながら検討していきたい。

(評価意見の検討)

【意見交換】(は委員発言要旨、・ は事務局発言要旨)

(英語指導助手招致事業)

英語教員は、昔と今の中学1年生の違いをどう感じているのだろうか。

生きた英語に触れさせることはある程度できていると思うが、さらなる増員が望ましい。

英語教育の目指すところをどこにするかによって、ALTは何人必要かが変わってくると思う。

中学校の英語教育を充実させるのか、小学校1・2年生に導入して、早い時期から英語に慣れ親しむ環境づくりに努めるのかなど、目的や目標、重点をどこに置くのかによって、必要なALTの人数も変わる。単に増員するだけでなく、明確な目的が必要ではないか。

目標によっては、留学生や藤女子大の学生の活用も考えられるのではないか。

ALTと情報教育は慣れが大事であって、早いうちに触れる機会を設けるのは必要だと思う。

(人材の活用)

SATは子どもに近い年齢の学生が入ることに意義がある。退職教員では目的が変わってくるのではないか。SATと地域の人材活用は分けて考えてはどうか。

(特別支援教育支援員)

学年に応じて対応も変わってくる。支援員の配置は小学1年生に限らず、学年が上がっても支援す

る仕組みが必要である。

(学力向上に関して)

全道、全国平均と比較するということではなく、学校ごとの目標が必要ではないか。

現在の指標設定では目指すところかわからないので、事業の効果を図れる指標や目標値の設定をすべきである。

(いじめ問題への対応について)

アンケート調査は、もっと内容を掘り下げたものにしてはどうか。

3 その他

(1)次回の日程確認

・次回、第11回委員会の開催日程を確認。

第11回 8月8日(水)9:30~(庁議室)

4 閉会(15:50)

平成 24 年 9 月 28 日 議事録確定

石狩市行政評価委員会 委員長 松 井 義 孝